

【D年】聖霊降臨節第8主日(2024年7月7日)

【旧約聖書日課】ミカ書 7章14～20節

- 14 あなたの杖をもって
御自分の民を牧してください
あなたの嗣業である羊の群れを。
彼らが豊かな牧場の森に
ただひとり守られて住み
遠い昔のように、バシヤンとギレアドで
草をはむことができるように。
- 15 お前がエジプトの地を出たときのように
彼らに驚くべき業をわたしは示す。
- 16 諸国の民は、どんな力を持っていても
それを見て、恥じる。彼らは口に手を当てて黙し
耳は聞く力を失う。
- 17 彼らは蛇のように
地を這うもののように塵をなめ
身を震わせながら岩を出て
我らの神、主の御前におののき
あなたを畏れ敬うであろう。
- 18 あなたのような神がほかにあろうか
咎を除き、罪を赦される神が。
神は御自分の嗣業の民の残りの者に
いつまでも怒りを保たれることはない
神は慈しみを喜ばれるゆえに。
- 19 主は再び我らを憐れみ
我らの咎を抑え
すべての罪を海の深みに投げ込まれる。
- 20 どうか、ヤコブにまことを
アブラハムに慈しみを示してください
その昔、我らの父祖にお誓いになったように。

【使徒書日課】使徒言行録 24章10～21節

- 10 総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。
- 11 確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていません。12 神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見ただけではありません。13 そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げる事ができません。14 しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したものと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。
- 15 更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱えています。16 こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。17 さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。18 私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、

人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。19 ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。20 きもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。21 彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章19～36節

- 19 そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言っておく。子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなされることはなんでも、子もそのとおりにする。20 父は子を愛して、御自分のなされることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。21 すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。22 また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。23 すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。24 はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。25 はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。26 父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようになさったからである。27 また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子からである。28 驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、29 善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。30 わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」
- 31 「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。32 わたしについて証しをなされる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなされる証しは真実であることを、わたしは知っている。33 あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34 わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言っておく。35 ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。36 しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ミカ書 7章14～20節

- 14 どうか、あなたの杖で、ご自分の民
あなたの所有の民である羊を治めてください。
彼らは森の中、果樹園の中に
一人離れて住んでいます。
遠い昔の日のようにバシャンとギルアドで
草をはむことができるようにしてください。
- 15 あなたがエジプトの地を出た時のように
私は奇しき業を彼らに示そう。
- 16 諸国民は見て、そのすべての力を恥じ
手を口に当て、その耳は聞こえなくなる。
- 17 彼らは蛇のように
地を這うもののように塵をなめ
皆から震え出て
恐れつつ私たちの神、主に近づき
あなたを恐れ敬うであろう。
- 18 あなたのような神がいるだろうか
ご自分の民である残りの者のために過ちを赦し
その背きの罪も見過ごされる方。
いつまでも怒りを持ち続けず
むしろ慈しみを望まれる方。
- 19 主は私たちを再び憐れみ
私たちの過ちを不問にされる。
あなたは私たちの罪をことごとく
海の深みに投げ込まれる。
- 20 どうか、ヤコブに真実を
アブラハムに慈しみを示してくださるように
あなたが遠い昔、私たちの先祖に誓われように。

使徒言行録 24章10～21節

10総督が発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が長年この民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。11お調べになれば分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっておりません。12神殿でも会堂でも町の中でも、この私が誰かと論争したり、群衆を扇動したりするのを、誰も見た者はおられません。13そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。14ただ、このことははっきり申し上げます。私は、彼らが分派と呼んでいるこの道に従って、先祖の神に仕え、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。15さらに、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。16こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を保つように、常に努めています。17さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。18その際、神殿の中で身を清めているところを人に見られたのですが、群衆もおらず、騒動もあ

りませんでした。19ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。20さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。21彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

ヨハネによる福音書 5章19～36節

19そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「よくよく言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何もすることができない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。20父は子を愛して、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたがたは驚くことになる。21父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える。22また、父は誰をも裁かず、裁きはすべて子に委ねておられる。23すべての人が、父を敬うように、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。24よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。25よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。26父が、ご自身の内に命を持っておられるように、子にもご自分の内に命を持つようにしてくださったからである。27また、父が裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。28このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。29そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。

30私は自分からは何もできない。聞くままに、裁く。そして私の裁きは正しい。それは、私が自分の意志ではなく、私をお遣わしになった方の御心を求めているからである。」

31「もし、私が自分自身について証しをするなら、私の証しは真実ではない。32私について証しをなさる方は別におられる。そして、その方が私について証しする証しは真実であることを、私は知っている。33あなたがたはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34私は人間による証しは受けない。しかし、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。35ヨハネは燃えて輝く灯であった。あなたがたは、しばらくの間、その光を楽しもうとした。36しかし、私には、ヨハネの証しにまさる証しがある。父が私に成し遂げるようにお与えになった業、つまり、私が行っている業そのものが、父が私をお遣わしになったことを証している。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月7日「聖霊降臨節第8主日」の日課主題は「復活の希望」。

・旧約聖書日課は、「ミカ書」から、本書末尾に置かれた希望を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、パウロが総督フェリクスの前で弁明したことを描く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、ベトザタの池の出来事を伝える説話に続いて置かれた主イエスの御言葉の箇所。

旧約日課(ミカ7章より)

・「ミカ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四卷「十二小預言者」の6番目に置かれた預言文書。本書標題(1:1)によれば、「預言者ミカ」は、「イザヤ書」の「預言者イザヤ」や「ホセア書」の「預言者ホセア」と同時代に南王国の三代の王に仕えた宮廷預言者。ただし、エルサレムの南西35キロに位置する「モレシエト」の出身とされており、エルサレムの神殿祭司ではなかったと推認される。「ミカ書」の預言は「サマリアとエルサレムについて幻に見たもの」とされており、アッシリアの軍事侵攻によって滅びゆく北王国の王権(支配者と宮廷預言者ら)と、北王国の圧力から逃れるためにアッシリアに従属する道を選びつつある南王国宮廷(特に神殿祭司)に対する非難を含む預言集としてまとめられている。過去資料「聖書と祈りの会 240616」も参照。

・本預言書は、北王国のサマリア王権の「イスラエル」がアッシリアによって滅ぼされた後、いずれ南王国ユダ=ダビデ王権がその「イスラエル」を治める者となるであろうことを告げている(5章)。その背景には、北王国の滅亡期に大量の政治難民・亡命者が南王国に流入し、また地方聖所権力も北王国サマリア王権を見限って南王国ユダ・エルサレム王権との関係構築にシフトしたことがあったと考えられる。そこで、日課箇所にも、南王国の歴史には直接関わらないが北王国の歴史上は支配領域を巡ってしばしば問題とされる「バシヤンとギレアド」が取り上げられる。これらの地域は、歴史的に北王国「イスラエル」が「バシヤンの王」や「アンモン人の王」、またアラム・ダマスコ王国と支配権をめぐる争ってきた。「ギレアド」は、「預言者エリヤ」の出身拠点としても知られる(王上17章)。このような、ユダ・エルサレムを中心とした「大イスラエル主義」の思想は、崩壊した北王国諸支配層から南王国にもたらされ、その後はエルサレムの神殿祭司である「預言者イザヤ」などを通して、ユダの祭司・預言者の間で時間をかけて醸成されていったものと考えられる。

・日課箇所は、本預言書の末尾を構成する章句で、他と性格を異にする様式で記されている。すなわち、この箇所は、もっぱら祈願・嘆願(14節、18~20節)とそれに応じてくださる主の告知(15~17節)で構成されており、「詩編」に多用される様式に近い。

使徒書日課(使徒24章)

・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻としてまとめられた「初代教会正史物語」。本書については、前回資料「聖書と祈りの会 240626」など参照。

・日課箇所は、エフェソを拠点とした宣教活動が行き詰まり、関係諸教会を巡った後に再びエルサレム教会を訪ね、ローマ行きの承諾を得ようとしていたパウロが、エルサレムで当局に拘束され、最高法院での取り調べを経てユダヤ総督フェリクスのもとに送致されていたとき、総督の取り調べに対して答弁したパウロの発言として描かれている。このときパウロは、最高法院のあるエルサレムからユダヤ州総督府のあるカイサリアに移送されている。カイサリアは、ヤッファから北に数十キロの港湾都市で、ユダヤ・サマリア地方の外れに位置するが、ヘロデ大王によって港湾都市として整備されて以降発展し、後6年にユダヤ属州としてローマ帝国に編入されると総督府が置かれるようになった。この地域は、海沿いにエジプトへの陸路が続き、内陸はガリラヤ地方を経て東方パルティア王国に対峙する軍事的要衝と位置づけられ、重視された。「使徒言行録」中では、初期教会の大きな転換点となる異邦人伝道容認のきっかけとなる「百人隊長コルネリウスの洗礼」(使徒10~11章)の出来事は、コルネリウスの配属部隊「イタリア隊」の駐屯地であるカイサリアで起こったこととして描かれている。コルネリウスの出来事はペトロの関与したことであるが、これが大きな突破口となって後のパウロによる異邦人伝道が初期教会の中で基礎づけられた共に、ローマの上流社会におけるキリスト教受容の端緒になった出来事としても位置付けられる。

・14節「分派(ハイレシス)」は、「使徒言行録」に6例の用例があるが(「使徒言行録」以外では3例)、キリスト者の教会を指して用いられているのは3例のみで(この箇所および24:5、28:22)、他の3例は「サドカイ派」や「ファリサイ派」を指して用いられている(5:17、15:5、26:5)。つまり、「ナザレ人の分派(ナザレ派)」と呼ばれている」という記述は、「使徒言行録」自体が自分たちキリスト者の教会を「サドカイ派」や「ファリサイ派」と並ぶ「ユダヤ教」の一派と自認していたことを示している。実際、日課箇所を含めたパウロの弁明として述べられている主張は、自分たちをユダヤ教から区別しようとするものではなく、飽くまでユダヤ教の中に位置づけようとするものとなっている。なお、21節「復活のことで…」は、23:6の叙述を受けたものであるが、パウロはそこで、自分の「死者が復活するという望み」を「ファリサイ派」の一人として主張しており、それゆえに一部のサドカイ派から責められている、という構図が描かれている。キリスト信者は、「ファリサイ派」の復活信仰(終末における審判に引き出されるためのすべての者の復活)を共有した上で、その「現在化」として「キリストの復活」がすでに起こったと主張し、これを全人類救済の根拠の一つとする。

福音書日課(ヨハネ 5 章より)

・日課箇所は、「ベツサタの池の出来事」の叙述に続いて置かれているが、必ずしもこの出来事と関連する内容ではない。「ベツサタの池の出来事」をきっかけに主イエスを殺そうとねらいはじめたユダヤ人たちの主張が「安息日の規律違反」と「神を父と呼び、神と等しい者と主張した」ことにあったとみなし、このユダヤ人たちの主張に対する反論として展開されているのが、日課箇所の主イエスの御言葉である。このような展開は、3 章の「ニコデモの訪問」を描く箇所でもなされており、本福音書に典型的な展開である。

・19 節、24 節、25 節「はっきり言うておく(アメン・アメン・レゴ・ヒュミン)」は、本福音書で多用される表現。「共観福音書」でもほぼ同じ表現が見られるが、その場合の原語は「アメン・レゴ・ヒュミン/ソイ」で、「アメン」を重ねて用いていない。この表現は、主イエスに特徴的と指摘されることもあるが、必ずしもそうとは言えない。言語表現としては、これだけが単独で「聞け」というニュアンスで用いられている場合(日課箇所では 19 節)と、関係節(ホテイ節)を続けて主張を強調するために用いられる場合がある。

来週の誕生日 (7 月 7 日～13 日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-357「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22 歳で早世した 18-19 世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讚美歌集(1784 年版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讚美歌。

・21-54「聖霊みちびく神のことはは」(= II 34「みたまのかよえる」)は、18 世紀英国で名を知られた詩人・讚美歌作家ウィリアム・クーパーの作詞。クーパーは、牧師家庭に育ったが、成人して自殺を企てたことから、「くすしみ恵み」の作者として知られる牧師ジョン・ニュートンのもとに引き取られて共に詩作活動をするようになった。曲は、もともとアイザック・ウォッツ作の讚美歌詞に付されていたものを転用。

・21-127「み恵みあふれる」は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クロンが自らも携わった讚美歌集に収録した讚美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讚美歌集に採用されて広まった。

・21-467 番「われらを導く」(II 22「みちからあふれる」歌詞)は、18 世紀英国のメソジスト牧師ウィリアムズ作のウェールズ語讚美歌が原作で、英語版ほか各国語訳で歌われてきた。曲は 19 世紀ウェールズの教会音楽家ヒューズの作。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.

2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.

21-54「聖霊みちびく神のことはは」

The Spirit Breathes upon the Word

1. The Spirit breathes upon the Word, / And brings the truth to sight; / Precepts and promises afford / A sanctifying light.
2. A glory gilds the sacred page, / Majestic, like the sun: / It gives a light to every age; / It gives, but borrows none, It gives, but borrows none.
3. The Hand that gave it still supplies / The gracious light and heat: / His truths upon the nations rise; / They rise, but never set, They rise, but never set.
4. Let everlasting thanks be thine / For such a bright display / As makes a world of darkness shine / With beams of heav'nly day, With beams of heav'nly day.
5. My soul rejoices to pursue / The steps of him I love. / Till glory break upon my view / In brighter worlds above, In brighter worlds above.

21-127「み恵みあふれる」

*Herrasta Veissa Kieleni**English Translation**O sing my soul, your Maker's praise*

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; His kingdom stands forever.

21-467「われらを導く」

Guide Me, O Thou Great Redeemer

1. Guide me ever, great Redeemer, / Pilgrim through this barren land. / I am weak, but you are mighty; / Hold me with your pow'ful hand. / Bread of heaven, bread of heaven, / Feed me now and evermore: / Feed me now and evermore.
2. Open now the crystal fountain / Where the healing waters flow; / Let the fire and cloudy pillar / Lead me all my journey through. / Strong deliv'rer, strong deliv'rer, / Shield me with your mighty arm; / Shield me with your mighty arm.
3. When I tread the verge of Jordan, / Bid my anxious fears subside; / Death of death and hell's destruction, / Land me safe on Canaan's side. / Songs and praises, songs and praises / I will raise forevermore; / I will raise forevermore.